

世界史B (補) 仏陀の思想2「スッタニパータ」

「蛇」の章

二 池に生える()①を、水にもぐって折り取るように、すっかり愛欲を断ってしまった修行者は、この世とかの世とをともに捨て去る。--蛇が脱皮して古い皮を捨て去るようなものである。

三 奔り流れる()②の水流を涸らし尺して余すことのない修行者は、この世とかの世とをともに捨て去る。--蛇が脱皮して古い皮を捨て去るようなものである。

九 走っても疾過ぎることなく、また遅れることもなく、「()③における一切のものは虚妄である」と知っている修行者は、この世とかの世とをともに捨て去る。--蛇が脱皮して古い皮を捨て去るようなものである。

「ダニヤ」の章

一八 ()④ダニヤがいった、

「わたしはもう飯を炊き、乳を搾ってしまった。マヒー河の岸のほとりに、わたしは（妻子と）ともに住んでいます。わが小屋の屋根は葺かれ、火は点されている。神よ、もしも雨を降らそうと望むなら、雨を降らせよ。」

一九 師は答えた、

「わたくしは怒ることなく、心の()⑤さを離れている。マヒー河の岸のほとりに一夜の宿りをなす。わが小舎(すなわち自身)はあばかれ、(欲情の)火は消えた。神よ、もしも雨を降らそうと望むなら、雨を降らせよ。」

「犀の角」の章

三五 あらゆる生きものに対して()⑥を加えることなく、あらゆる生きもののいずれをも悩ますことなく、また子を欲するなかれ。況んや朋友をや。犀の角のようにただ独り歩め。

五六 ()⑦ことなく、詐ることなく、渴望することなく、(見せかけで)覆うことなく、濁りと迷妄とを除き去り、全世界において妄執のないものとなって、犀の角のようにただ独り歩め。

五七 義ならざるものを見て邪曲にとらわれている悪い()⑧を避けよ。貪りに耽り怠っている人に、みずから親しむな。犀の角のようにただ独り歩め。

六〇 妻子も、父母も、()⑨も穀物も、親族やそのほかあらゆる欲望までも、すべて捨てて、犀の角のようにただ独り歩め。

七五 今の人々は自分の()⑩のために交わりを結び、また他人に奉仕する。今日、利益をめざさない友は、得がたい。自分の利益のみを知る人間は、きたならしい。犀の角のようにただ独り歩め。

「賤しい人」の章

一一七 一度生まれるもの(胎生)でも、二度生まれるもの(卵生)でも、この世で生きものを害し、生きものに対するあわれみのない人、--かれを()⑪であると知れ。

一一八 村や町を破壊し、包囲し、()⑫として一般に知られる人、--かれを賤しい人であると知れ。

一二七 ()⑬を行なっておきながら、『誰もわたしのしたことを知らないように』と望み、隠し事をする人、--かれを賤しい人であると知れ。

一三五 実際は尊敬さるべき人ではないのに尊敬さるべき人、()⑭であると自称し、梵天(注)を含む世界の盗賊である人--かれこそ実に最下の賤しい人である。わたくしがそなたたちに説き示したこれらの人々は、実に〈賤しい人〉と呼ばれる。

(注)古代バラモン教における世界創造の最高神

「スッタニパータ」--仏教の多数の経典の中でも最も古いもの。パーリ語経典の1つ。ブッダの生前の言葉に最も近い語句を、ブッダの死後その弟子達が簡潔な詩の形でまとめ、集成したもの。「仏陀の言葉」

一三六 生れによって賤しい人となるのではない。生れによってバラモンとなるのではない。()⑮によって賤しい人ともなり、()⑮によってバラモンともなる。「慈しみ」の章

一四四 足ることを知り、わずかの食物で暮し、雑務少く、生活もまた簡素であり、諸々の感官が静まり、聡明で、高ぶることなく、諸々の(ひとの)家で貧ることがない。

一四九 あたかも、()⑯が己が独り子を命を賭けても護るように、そのように一切の生きとし生けるものどもに対しても、無量の(慈しみの)ところを起すべし。また全世界に対して無量の慈しみの意(ところ)を起すべし。上に、下に、また横に、障害なく怨みなく敵意なき(慈しみを行うべし)。
一五一 立ちつつも、歩みつつも、座しつつも、臥しつつも、眠らないでいる限りは、この()⑰の心づかいをしっかりとたもて。この世では、この状態を崇高な境地と呼ぶ。

一五二 諸々の邪まな見解にとらわれず、戒を保ち、見るはたらきを具えて、諸々の欲望に関する貪りを除いた人は、決して再び()⑱に宿ることがないであろう。

「なまぐさ」の章

二四七 この世でほしいままに生きものを殺し、他人のものを奪って、かえってかれらを害しようと努め、たちが悪く、残酷で、粗暴で無礼な人々、これがなまぐさである。()⑲することが〈なまぐさい〉のではない。

二四八 これら(生けるものども)に対して貪り求め、敵対して殺し、常に(害を)なすことにつとめる人々は、死んでからは暗黒に入り、頭を逆さまにして()⑳に落ちる、--これがなまぐさである。肉食することが〈なまぐざい〉のではない。

二四九 魚肉・獣肉(を食わないこと)も、断食も、裸体も、剃髪も、結髪も、塵垢にまみれることも、粗い鹿の皮(を着ること)も、火神への献供につとめることも、あるいはまた世の中でなされるような、不死を得るための()㉑も、(ヴェーダの)呪文も、供儀(くぎ)(注・神々に犠牲を捧げるることも)、祭祀も、季節の荒行も、それらは、疑念を超えていなければ、その人を清めることができない。

「学生ブンナカの質問」の章

一〇四五 ブンナカさんがいった、

「先生！およそこの世で仙人や常の人々や王族やバラモンが盛んに神々に()㉒を捧げましたが、祭祀の道において怠らなかったかれらは、生と老衰をのり超えたのでしょうか？わが親愛な【 】㉓よ。あなたにおたずねします。それをわたしに説いてください。」

一〇四六 師は答えた、

「ブンナカよ。かれらは希望し、称讃し、熱望して、献供する。利得を得ることによって欲望を達成しようと望んでいるのである。供儀に専念している者どもは、この世の()㉔を貪って止まない。かれらは生や老衰をのり超えていない、とわたしは説く。」

・母 ・母胎 ・苦行 ・生存 ・肉食 ・財宝 ・蓮華 ・暴力 ・世間 ・朋友
・妄執 ・頑迷 ・行為 ・犠牲 ・聖者 ・悪事 ・地獄 ・利益 ・貪る
・慈しみ ・圧制者 ・牛飼い ・賤しい人